

整形した女は
幸せになって

いるのか

北条かや

顔さえ変えれば、
うまくいく？

社会学の俊英が解き明かす、
美と幸福のふしぎな関係



モデル：北条かや

整形した女は幸せになっているのか
北条かや

星海社

65



SEIKAISHA
SHINSHO

男の人って、本当に可愛くない
子には、お前ブスとか、直接言
わないじゃないですか。陰で言
うじゃないですか。あたし、自
分が陰で凄い言われてたのを知
っていたから

友達の友達が整形してる
って言うのだったら、
もう無限に聞きますね

いつか絶対、整形しようっていうのはもう、中学の頃から決めてたんですね。いつかお金貯まったらやろうって。母親には『絶対整形するから』って宣言してました

彼氏と結婚することになったら、子供の時の写真とか、見るかもしれないじゃないですか。バレるかな？ でも大丈夫だろう、みたいな感じで、そんなに心配はしていません。すごい関係が深まったから心配だけどもまあ大丈夫かなみたいな。言う必要もないかなと思いますね

ネガティブのまま行くのは嫌だ
なっというか。それは何か気に
食わないな、みたいな感じで、
色々克服していこうとした結果、
整形もやったし、勉強もしたし、
みたいな

は
じ
め
に

「あなたが何かを羨望せんぼうするとき
あなたはその何かをもっていない」

あなたの恋人が、「整形だったの」とカミングアウトしたら？

自分の中に、ブスな私と、ブスではない私がいる。

寝不足でクマが消えない日、恋人に振られた日、仕事の後、電車の窓に映った私は一五歳くらい老けて見える。ブスに写った写真は私じゃない。顔がデカイ。脚が太い。目が小さい。

一方で、お化粧のノリが抜群によい朝、風呂あがりの上気したツヤのある頬、まつ毛のカールが上手くキマった日の夜。いつまでもメイクを落とさず、このまま綺麗な自分に浸っていたと思う。美人に撮ってもらった写真が、本当の私。

自分の中に、ブスな私と、ブスではない私がいる。どちらも私のはずだけど、ブスな私は見たくない。葬り去ってしまいたい。ブスな私を消し去る方法。気に入らないところを全部、見ないようにする手段、納得行くまで、「本当の私」を追求させてくれる方法がある。美容整形だ。

アイドルやモデルの整形ネタがネットにあふれ、小中高の卒業アルバムやデビューした頃の写真を引っ張りだされて、匿名の誰かに Before → After の検証をされるこの時代。彼

女たちの「整形疑惑」はネットの海を漂い、毎日のように誰かのゴシップ心を満たしている。そんな、ちょっと下世話な関心を惹きつける美容整形は、ここ数年、一般人にとってもますます身近なものとなっている。

クロス・マーケティング社が二〇一〇年に行った調査では、一八〜三九歳の女性のうち、美容整形をしたことのある人は一一%もいた。調査対象には、アンチエイジングのニーズが高まる四〇代以上が入っていないため、実際はもっと多くなるだろう。今やすっかり定番となったプチ整形、「レーザーのシミ取り」や「シワとり注射」などを受けている中高年女性も含めれば、女性全体の三割くらいになるかもしれない。同調査では一〇〜六〇代前半の女性の四人に一人が「今後、美容クリニックでの施術を行ってみたい」と答えたという。

これだけ美容整形へのニーズが高まり、クリニック数も増加し続けているのに、「整形」は身近なようで、どこか遠いものに感じられる。身近なようで身近でない美容整形をめぐるこの「不確かさ」を、一体どう説明すればよいのか。

整形は、メイク・エステの領域を超えた「医療行為」だ。一方で、自由診療の美容整形と、保険診療の医療とを分かちものも確かにある。「ホンモノの医療」^{*2}かどうかもはっきりしないこの現象について、私たちはあまりにも語ることを持つていない。

あなたの整形許容度はどの程度だろうか。片思いの女性が整形していると知ったら、幻滅しないか？ 恋人や妻が「整形したい」と言い出したら、なんと答えるか。恋人が、いきなり目をパッチリ二重^{ふたえ}にしてきたら、なんと言うだろう。

レーザーでのシミ取りやホクロ除去など、顔を大きく変えない整形ならよいか。だとしたら、その理由を「顔を変えたい」と言う彼女に、納得行くよう説明できるか。

彼女はこう反論するかもしれない。

「私はこの顔が嫌だから、整形したい。あなたは『顔を変えるのがダメで、それ以外の整形ならいい』って言うけれど、その根拠はなに？」

1 「ポーラ文化研究所」女性の化粧行動・意識に関する実態調査二〇一二「美容篇」

2 「美容外科」の標榜は、国が認めているれっきとした診療科目である。

では、アイドルならどうか。今まで通りファンでいられるか？ どうせ会うこともない偶像なら、顔でも胸でも整形してもらって、より可愛くなってもらう方が良いだろうか。

モデルは美を探求する職業だから、よいか。下着モデルだったミランダ・カーが、より下着を美しく演出するために豊胸手術をするとしたら、どう思うか。そこに何か、ひっかかることはないだろうか。

アイドルやモデルよりも、より性的な目で見るAV女優はどうか。一〇年近いキャリアをもつAV女優の顔（元々かわいらしいのに）が、どんどん変化していくことについてはどうだろうか。「デビュー当時の顔のほうが好みだなあ」と、あなたは彼女を前にして言うのだろうか。あなたにそれを言う権利はあるのだろうか。

AV女優であれば、あなたはその「消費者」だから、整形について色々言う権利が、辛うじてあるのかもしれない。それとも、もっと大きくて倫理的な観点から「顔を変えるなんて……」と審判しているつもりだろうか。だとすれば、話は違ってくるだろう。

美容整形は、私たちの体や心をめぐる根源的な問いをいくつも発してくる。

「美しいことは良いことだ」という市場原理のもと、美容整形市場は年々拡大している。診療所や医師数も右肩上がりだ。「周りに整形したことのある子が一人もいない」という女性性は、ほとんどいないのではないか。

本書では、そんな「美容整形」について、「幸福」という観点から掘り下げる。「顔を変ええることはなぜ、うしろめたいのか」、もっといえば「美しくなろうとすることが、どうしてうしろめたいのか」「私の身体は誰のものか」。

この社会は、誰もが外見で判断される「見た目依存社会」だ。外見が良い人は、男女にかかわらず得をする。外見が悪い人は、本来であれば抱かなくていいはずの劣等感を抱いたり、最悪の場合、いじめられて心に深い傷を負ったりもする。

「だったら整形して、みんなが綺麗になればいいじゃん。そしたらきっと、沢山の人が幸せになるでしょう?」

美の市場における「最大多数の最大幸福」をかなえる技術は、すでに整っている。一度でも外見にコンプレックスをもった経験のある人なら、「綺麗になるのは良いことだ」とのメッセージに抗うのが困難であることは、分かると思う。メイクやエステから整形まで、

人が「美しくなろうとする行為」を否定することは難しい。が、その行為にはポジティブさと同時に、どこかで浅ましさを後ろめたさもつきまとう。「人は顔ではなくて心である」との言説は、昔も今も説得力をもつ。

一方で、こんな疑問も湧いてくる。「外見を整えて綺麗になる≡幸せ」は、どこまで本当だろうか。もしかしたら、「幸せにつながる美容整形」と、そうではない美容整形があるのかもしれない。だとすれば両者を分かつものは何か。

美容整形に象徴的な「身体加工」を批判する言説として、今やすっかり古びつつも、一定の効力を持つものの一つに、「親からもらった体に傷をつけるなんて」という言い方がある。だが、最近では「体にほとんど傷をつけない」施術だって沢山ある。

それにすら抵抗感をもつとしたら、あなたの中では、なんらかの「倫理の線引き」が行われていることになる。

その「倫理の線引き」にはおそらく、あなたなりの理由があるはずだ。この本の最終目的は、人それぞれがもつ「倫理の線引き」の理由や成り立ちまでを考察することにある。現代の女性たちが、「もっと綺麗になりたい」と、気軽に医療施設を訪れていること、綺麗

になるため、身体に注射をしたり、メスを入れたりしていること。留まるところを知らない「美への欲望」が、ぶくぶくと膨張していること。そういう現実を、「自分とあの人たちは違う」と考える人もいるだろう。彼^{ひが}我の壁を作って、安心したいのかもしれないが、もつたいないとも思う。

美醜や外見コンプレックスの問題、身体加工の是非をめぐる議論は尽きない。この本では、先行研究の検討や、整形経験者への聞き取り調査（若い女の子たちの「美意識」は、とくに時代の先を行っている）、整形体験をエッセイに著した作家の中村^{なかむら}うさぎさんへのインタビュー、岡崎京子が美容整形をテーマに描いた『ヘルタースケルター』などの作品批評を通して、現代社会の「美」をめぐる問題と、徹底して向き合ってみようと思う。

あなたの恋人が、「整形だったの」とカミングアウトしたら？ 9

第二章 「美容整形」について、語りすぎているようで、何も語っていない私たち

ぐりとぐらの「実況」美容整形 25

「自分の手で、あの子みたいな理想の幅広ふたえ二重を」 27

「整形予備軍」は、中学生にも沢山いる 29

浜崎あゆみの「逸脱」ぷりと「ブス」の定義 31

美容整形の市場規模は二〇〇〇億円 35

美容整形の起源は古代インド「鼻を切り取られた女性が……」 38

「コンプレックス」概念によって、美容整形が正当化された 40

「プチ整形」ブームによる、整形のカジュアル化 42

常に進化し、定義できない「プチ整形」 44

あふれる「ビューティー・コロシウム」の「お説教」が人々を安心させる 48

なぜ整形を受けるだけで「ゴミ雑巾」「ゴリラの化け物」と書かれるのか 51

作家、中村うさぎの整形が批判されたのは、理由が「安易」だから？ 54

整形したい理由は、七割が「自己満足」「理想の自分に近づきたいから」 56

整形をめぐる言説は、同じ所をぐるぐる回っている 60

「異形」扱いはされる整形美人たち 62

第二章 それぞれの「ダウンタイム」ストーリー 65

整形経験者にインタビュー 67

ダウンタイムも冷静 69

「やっぱり、すっぴんでも二重ふたえになりたい」 71

「二重ふたえだと全然、顔が違うね」 73

母親も説得して、ついに整形を決意 76

ダウンタイムの不安と「経過報告ブログ」 77

抜糸が終わり、徐々に「理想の二重ふたえ」が完成 79

女は「改善」のために整形する 87

会社での噂 92

「あなたって、前向きなのか後ろ向きなのか、分からないね」 93

母親に請求書が見つかった 102

美容整形とフェイスブック 103

「鼻だけやったら、もう全部終わりにしよう」 105

男性は、可愛くない子の前で「キミ、可愛くないね」とは言わない 107

第三章 「整形したい」の底にあるモチベーションを紐解く 111

身体へと向かう、哲学、社会学のまなざし 113

「フィットネス」と「ボディコンシャス」概念が変えた、私たちの身体感覚 115

カラダを「フィットさせる」ための整形 117

身体がアイデンティティをつくる 119

「女性たちは美の神話に囚とらわれている」 121

女の欲望が、ひとつの医療分野を発展させた 123

六〇年代のトゥイギーが変えた「理想のボディイメージ」 126

日本でもつけまつげが発売、欧米風の「パッチリ目」が理想に 128

男子が知らないアイプチブーム 130

アイプチが喚起した、二重まぶたへの欲望 133

「メイクは武装」 135

女子大生たちは「すっぴん」に自信がない 138

「整形メイク」に宿るポジティブ性 140

整形は、「すっぴんをメイクした顔に近づける行為」である 142

「外見コンプレックスが強いから整形する」では説明できない動機 145

「コンプレックスに苦しむ↓整形する」というのは、短絡的な図式である

「本当の自分の顔」を固定するために、整形する 151

整形とナルシズム 154

整形する人と、しない人の違いは行動力か？ 158

「私探し」と整形ジプシー 160

子供が自分の顔に似ていなかったら、どうする？ 163

自分が「どうなりたいのか」、整形したことで考え始める女性たち 167

第四章 うさぎさん、美容整形で「幸せ」になれますか？ 171

中村うさぎさんに会いに行く 173

美意識が高い女性たちに、プチ整形は大反響 177

顔を「忘れる」適応力 178

訳の分からないクリームを入れてしまう理由 181

整形した結果、内面と外見が一致するという事実 184

好きだったホストも「いらぬ」 186

異性からの、客観的な評価が欲しい！ 188

「トロフィー」としての美貌 190

整形によつて「自己」、そして「他者」と向き合う 194

「足るを知る」ことができるか 196

「勘違いブス」と呼ばれる女たちについて 197

女子校でのヒエラルキーと「美」への渴望 200

美しくなつて男に好かれたいという欲望を、フェミニストはどう捉えるのか 202

「小ブス」だからこそ整形できる!? 207

「ブス」を「笑い」に変える戦略 210

ブスは自分を嗤えるか？ 212

整形の後ろめたさと付き合う 215

整形はズルいが、「愛」があれば許される？ 218

整形の後ろめたさと「お金」 220

「エロス権力」を手に入れた女への恐怖 223

整形したら、幸せになるのか、それとも不幸になるのか？ 226

美の市場から、いつ降りるのか 231

病気になって気づいた「それでも美醜の市場からは、降りられない」ということ

236

終章 踏み越えられていく「タブー」 243

「美しさ」を追求するグロテスクさ 245

整形してフラれた女の物語 247

「あなたのために整形する」は、なぜ嬉しくないのか 250

「私の顔」は他人のもの 254

『ヘルタースケルター』の「りりこ」が手放し、そして手に入れた「顔」とは 257

他人は「私」の顔に、勝手に色を塗る 260

メスを入れるのはそれからいい 262

第一章

「美容整形」について、語りすぎているようで、何も語っていない私たち

「美容整形を受ける人って、そんなに多いんですか」

晶世はおもむろに目を向けた。

「多いわよ、でなきやこんなクリニックが開院するわけないじゃない。女性誌を見てみなさい、広告がどんなに出てるか。米国では年間一〇〇万件を超えてるけど、日本もいずれそうなるんじゃないかしら。あなたも興味ある？」

ぐりとぐらの「実況」美容整形

一九八八年生まれの吉川ちえ・ちか姉妹は、福岡出身。地元で日雇いのホステスをしてきたが、二〇一〇年頃から「吉川ぐり・ぐら」として「小悪魔 *aseta*」(インフォレスト社)に登場し、すぐに人気読者モデルとなった。そんな二人が二〇代半ばを迎え、本名の「吉川ちえ・ちか」に改名した後のこと。彼女たちはそろって、二重まぶたの整形手術を公表、ブログで術後の経過を「実況」したのである。(図1)

「こんばんわ(*・v・*)皆に報告です今日の夕方に二重整形手術をしたよん無事に終わってホッとした笑 とりあえず今は新幹線で家に帰ってます」(吉川ちえ・姉^{*3})

「二重切開終わったw プラス顔の脂肪溶かす注射したから顔が腫れてる(*・▽・*)// 帰りの新幹線で血がたれてきたw これが本当のハロ



図1 吉川ちか妹のツイート、
2014年11月1日20時49分

彼女たちは、ブログやツイッターで、

「手術中は何か目に圧迫感があつてその圧迫感とまぶたを縫われてる感があるだけであとは全然平気で楽勝でした全く痛くないのにびっくり ただ術後に自分の顔を鏡で見
た時は化け物すぎて昨日のハロウィンを思い出したよ笑」*⁵

「術後だから目がやばいことになんか強く腫れててワロタ」「これが本当のハロウィンW」と、軽いニュアンスで経過を報告した。

屈託のない調子でつぶられた彼女たちのブログには、まるで「ガチャピン」のように腫れあがった、術後の二重まぶたの写真が何枚もアップされた。普段見ることのない「整形直後の顔の写真」は、読者に衝撃を与えた。

彼女たちのブログやツイートは、ネットで一気に拡散。ファンからは「二重手術お疲れさま!!」「どこのクリニックですか?」「経過レポ楽しみにしてます(> <)」などの反応もあったが、「気持ち悪い」とか「怖い」などの声も目立った。誹謗中傷に近いコメントもあ

った。

整形することを「予告」し、その経過をネットにアップすることに対して、世間の反応は真つ二つに分かれた。

一見どこも悪くないのに、「もつと綺麗になりたいから」という理由「だけ」で整形するという行為、その経過をファンに伝えることについて、あなたは思うだろうか。

「自分の手で、あの子みたいな理想の幅広^{ふたえ}二重を」

吉川ちえのブログによると、姉妹は以前から「二重整形をしようかどうか、悩んでいた」ことが分かる。彼女は「アイプチの液やメザイクがあわない体質」だったとみられ、何年もアイプチを使い続けたせいでまぶたが荒れ、無意識に搔いてしまうこともあったようだ。写真を見ると、まぶたが赤くなり、皮膚がのびているようにも見える。そこで美容整形外科のカウンセリングを受けたところ、二重手術^{ふたえ}を勧められたとのことだ^{*}。

4 吉川ちか ツイート 二〇一四年一月一日二〇時四九分

5 CROOZブログ 二〇一四年一月一日二時三二分

6 整形するつもりでカウンセリングへ行ったのだから、手術を勧められるのは当たり前ではある。

ただ、彼女たちはもともと、二重まぶたになりたいという欲望があったからこそ「アイプチ」をしていたわけで、今回の手術も「アイプチで荒れた皮膚の悩みを解消するため」というよりは、「二重になりたい」という欲望をより具体的に叶えるためのものであろう。アイプチで皮膚が荒れるのがイヤなら、アイプチをやめればよいからだ。が、それは不可能である。

彼女たちのまぶたは元々、奥二重に近い形である。そこにストレッチ性のあるファイバー（メザイク^{*ア}）を食い込ませ、メザイクの両端を「アイプチ」という糊で留める。アイラインを太く引き、つけまつげをつければ、浜崎あゆみや益若つばさのような幅広い二重の完成だ（図2）。

化粧品に関心のない人は、「そこまで手間をかけてどうするんだ？」と思うかもしれない。しかし女子にとっては死活問題なのだ。「二重まぶたづくり」にかける女子たちのエネルギーはすさまじく、テクニク



図2 「小悪魔 ageha」
インフォレスト、2011年5月号

は日々進化している。一〇代後半の女子たちが読む「Popreen」(角川春樹事務所)や「S cawaii!」(主婦の友社)、「小悪魔 ageha」*などのギャル雑誌を見ると、「自分の手で、あの子みたいな理想の幅広二重を」(図3)というコピーにも表れているように、彼女たちの情熱が伝わってくる。

「整形予備軍」は、中学生にも沢山いる

筆者が、まだ文章で食べていけず学習塾で働いていた時のことだ。女子中学生が「先生、こっちの目だけアイプチしてみたんだけど、どう?」と見せてくれることがあった。「そうなんだ、いつもとちょっと違うね。でもいいんじゃない」と答えると、今度は「先生ってカラコン入れてるの? ナチュラルだよね、私も同じの欲しい!」「Popreen」のみぞきでい、可愛い〜」「でも最近、ちょっと化粧濃くない? メザイク使ってるのかな〜」。

親が知らないところで、子供たちは二重まぶたメイクを覚え、可愛くなることの快樂を

7 株式会社アーツブレインズが二〇〇一年に発売した二重メイク用の化粧品。伸縮するファイバー材を、作りたい二重のラインに食い込ませて「リアルな二重」を形成する。

8 二〇一四年五月号で休刊したが、二〇一五年三月に「復刊予定」が報じられた。



図3 「小悪魔ageha」
インフォレスト、2010年9月号

知る。その中から「整形予備軍」も生まれるのである。

今から一〇年以上も前、二重をつくる方法といえ、糊状のアイプチか、流行り始めたメザイクの二種類しかなかった。それに比べれば、今の二重メイクは多様化し、同時にどんどん過熱している。二重まぶたメイクの方法「だけ」で、一冊の本が作れるほどだ。そして、そうしたムック本は現に発売されており、一〇代女子にヒットしている。

最近のトレンドは、透명한「ばんそうこう」を細く切って二重のラインに貼り付け、固定する方法だ。一〇〇円ショップで売られているアイテープや、軸の太いつけまつげを食い込ませることで、よりくつきりした二重を作る子もいる。

二重の整形手術を受ける女子は、スッピンよりも「二重まぶたの私」に慣れている。アイプチで作った二重まぶたで化粧し、プリクラや「盛り写メ」を撮ることに慣れている。後述するが(第三章)、次第に「二重の方がスッピンよりも『本当の私』」と考えるようになる子も多いのだ。

「理想」と「現実」の顔にギャップが生じ、「理想の顔」を叶える手段があると知る過程で、整形へのモチベーションは生まれる。

浜崎あゆみの「逸脱」ぶりと「ブス」の定義

先ほど引用した、吉川ちえ・ちかはあくまで「読者モデル」なので、整形という行為も「キャラの一部」として演出し、読者に親しみを持ってもらうための「戦略」とみることができる。

しかし多くの芸能人にとって、「整形していること」がキャラとしてプラスになることはほとんどない。見目麗しきをもって化粧品広告に起用されたり、モデルとしてのカリスマ性を演出したりしている芸能人たちは、その美が「偽装」だとバレてしまった瞬間、「商品」としての価値が暴落する（と思われる）からだ。タレントはその名の通り「才能」ある存在であってほしい。その美しさも才能のように、生まれつきのものであってほしいのだ。

ネット上には、芸能人たちの「整形疑惑」をまとめたサイトが山ほどある。ご丁寧に卒業アルバムを探し出してきたり、無名だった頃の写真を並べて比較したりしているが、人の顔はメイクやダイエットでそうとう変わるのだから、「検証」はだいたいの未遂に終わる。

人々にとって重要であるにもかかわらず、真偽が曖昧なニュースは、噂として広まりや

すい。^{＊9} 震災後のデマや大企業の不祥事など、多くの人が重要だと考え、かつ情報量が少ない（本当かどうかハッキリしない）噂は、あつという間に広がりメディアを席卷する。^{せっけん}

こうした「社会性のある噂」に対し、「整形ゴシップ」が表沙汰になることはあまりない。整形疑惑のニュースは、確かに「曖昧」だが、社会的な重要度がそれほどでもないために、大きなニュースにはならないのだろう。芸能人の顔や身体にかんするネタは、タレント事務所やメディア関係者間の「大人の事情」で、タブーとされる場合も多い。

一方、インターネットの掲示板などの猥雑なコミュニティ内では、「整形疑惑ネタ」が、常に人々の関心を集め続けている。中でも「浜崎あゆみ」は、これまでに数えきれないほど、そのターゲットになってきた存在だ。彼女の顔は、良い意味で、通常の基準からは「逸脱」しているからだ。

美容外科のタカナシクリニックを運営する高梨真教院長によると、美人の基準には「黄金比」があるという^{＊10}（図4）。

高梨院長によると、顔の理想型Ⅱ「黄金比」は、ドクターによってどこを計測するか等の条件が違いため、統一されたものはない。が、私たちが無意

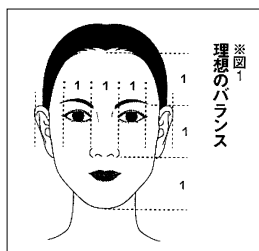


図4 中村うさぎ [共著]『マッド高梨の美容整形講座』マガジンハウス、2006

識に持つ「なんとなく不快感のない綺麗な顔」というのは存在する。それがこの「黄金比からなる美人」だ。

一方で、「黄金比顔」は不快感こそないものの、まったく個性的ではない。数値的な黄金比美人は、「無個性」なのだ。

数値的な黄金比からの「ズレ」Ⅱ「逸脱」は、その人の「個性」になる。高梨院長によれば、黄金比からの逸脱が大きすぎる顔は「ブス」だとみなされる。鼻が大きすぎたり、目が小さすぎたりする顔は、黄金比を一〇〇点とした場合、六〇点くらいの逸脱になるだろう。それもまた「個性」ではあるが、逸脱が大きすぎるために「悪い個性（ブス、ブサイク）」とされてしまう。

逆に「逸脱」の幅が小さく、かつ良い方向へのズレであれば「美人」となる。目が多少大きい顔などは「理想型」とみなされやすい。浜崎あゆみの大きな目は、理想値から良い方向へ少しだけ「逸脱」しており、それが彼女の魅力につながっているのである。点数で

9 G・W・オルポート、L・ポストマン、南博訳『デマの心理学 岩波モダンクラシックス』岩波書店、二〇〇八

10 高梨真教、中村うさぎ『マッド高梨の美容整形講座』マガジンハウス、二〇〇六

言えば、九八点くらいだろうか。

あゆの顔は、魅力的ではあるが「逸脱」していることに違いはなく、良くも悪くも「異形^{ぎよう}」である。だからこそ「あんなに目が大きい人間がいるわけがない」と、一部のアンチから整形疑惑を抱かれる。

一方で彼女の「個性的な顔」は、二〇〇〇年代のギャルたちにとって憧れの「型」となった。浜崎あゆみが人気を博した二〇〇〇年代初頭から十数年間、ギャルたちの理想の顔は、基本的に「あゆ」だ。

先日、ギャル雑誌「egg^{*11}」(大洋図書)などで活躍していた人気モデル、ゆんころ(小原優花^か)が、テレビのバラエティ番組で「あゆ風ものまねメイク」を披露して話題になった。彼女は「(あゆの)コスプレのクオリティを上げたくて、歯を一二〇万円かけて矯正した」と語った。

全国で美容外科を展開する高須クリニック^{たかす みきや}の高須幹弥医師によると、最近の一〇〜二〇年代女性で二重まぶた手術を希望する人のうち、実に「五〇%強の方が幅広平行の二重を希望する^{*12}」という。幅広平行の二重とは、日本人に多い「末広型」の二重まぶた(奥二重に近い)ではなく、浜崎あゆみのような目のことだ。欧米人や、ハーフタレントのような目、と

もいえる。二重の幅が広く、華やかに見えるあゆの目は、ギャルたちにとって「整形して
なりたい目ナンバーワン」なのである。

美容整形の市場規模は二〇〇〇億円

「はじめに」で引用したクロス・マーケティング社の調査(2010年)では、全国に住む一八
〜三九歳の女性、一万人あまりのうち、整形経験率は一一%だった。同調査の対象は一〇
〜三〇代の女性である。近年は「美魔女」ブームに象徴されるように、四〇代以上の中高
年層もアンチエイジングのために美容外科を訪れるようになってきているから、実際はもっと
多いだろう。レーザーでのシミ取りや、注射によるシワ取りなど、比較的ハードルの低い
プチ整形を経験している中高年は沢山いる。整形経験者は、少なく見積もっても全体の三
割程度はいるのではないか。

やや古いデータになるが、日本能率協会総合研究所は二〇〇八年の時点で、「美容整形の

11 二〇一四年五月三十一日発売号で休刊。

12 高須クリニック公式サイト「顔の施術について〜腫れぼったいまぶたの方に幅広平行二重をつくと不自然になる?〜」
容整形講座 Dr.高須幹弥の美

市場規模」を二〇〇〇億円と推定している。^{*13}

矢野経済研究所の試算では、日本の化粧品市場が二兆三二〇〇億円、ヘアサロンなどの理美容市場が二兆二〇〇〇億円^{*15}（それぞれ二〇一三年度）なので、美容整形市場はその一分のいくらいだ。国内エステサロンの市場規模が三五〇〇億円^{*16}なので、整形のマーケット規模はエステサロンのそれと近いかもしれない。小さいといえば小さいが、決して無視できない大きさだ。

美容整形の患者数や市場規模に関する公的なデータはないが、唯一、厚生労働省の「医療施設調査」では、診療科目に「美容外科」をかかげる医療施設数が公開されている。一九七八年に「美容外科」が正式な診療科（標榜科）として認められてからの推移を、グラフにしてみた（図5）。一九九〇年代後半からの伸びが大きいのが一目瞭然だ。

二〇一三年時点で、患者二〇人以上が入院できる施設をもつ「美容外科（病院）」^{*17}は、全国に一二二ある。入院施設をもたない、もしくは一九人以下の入院施設をもつ「美容外科（診療所）」は一〇六八

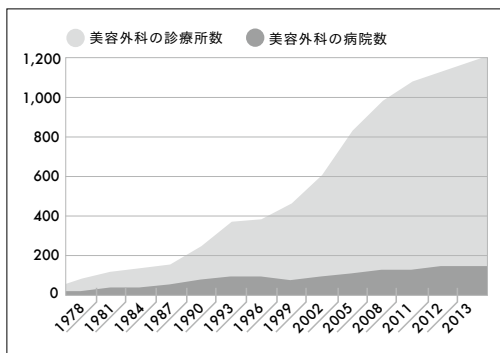


図5 日本国内における「美容外科」の数

もある。

一九八八年に開院し、現在は全国に四八院^{*18}を展開する「品川美容外科」によれば、二六年間に得られた症例数は四〇〇万件にのぼるといふ。「四〇〇万症例」を単純に二六年で割ると、一年あたり一五万、一日あたり四〇〇症例になる。品川美容外科は近年、低価格を売りに規模を拡大しているため、ここ数年の一日あたりの症例数はもっと多いだろう。

これまた全国に三六院を展開する「SBC湘南美容外科クリニック」^{*19}は、一年間に五九

- 13 M D B 市場情報レポート美容整形（抜粋版）
- 14 矢野経済研究所 化粧品市場に関する調査結果二〇一四
- 15 矢野経済研究所 理美容市場に関する調査結果二〇一四
- 16 矢野経済研究所 エステティックサロン市場に関する調査結果二〇一三
- 17 患者二〇人以上の入院施設をもつ医療施設。
- 18 二〇一四年二月時点、品川美容外科公式サイト
- 19 二〇一四年二月時点、湘南美容外科公式サイト

西暦	病院数	診療所数
1978	12	74
1981	20	109
1984	30	132
1987	37	154
1990	62	247
1993	71	364
1996	77	377
1999	60	460
2002	70	604
2005	93	824
2008	108	983
2011	118	1,068
2012	123	
2013	122	

図6 図5の折れ線グラフの数値を表にしたもの

※「病院報告」は毎年行われているが、「医療施設調査」は3年に一度の実施なので、最新のデータは2011年のものである

万三三一四人、施術数は七三万二六〇三件に達するという（二〇一三年度）。ひとつの医療チェーンだけで、一日あたり二〇〇〇〇件の施術が行われている計算だ。

これらの実績はいずれも各医院の公式ホームページに掲載されているもので、「実績の多さ＝安心」というイメージ戦略だろう。かならずしも美容整形の「実態」を正確に表したものとはいえない切れないが、ひとつの目安にはなる。大手チェーンが規模を拡大し、美容整形業界はますます盛り上がりを見せている。

美容整形の起源は古代インド「鼻を切り取られた女性が……」

「美容整形」のはじまりはいつか。社会学者の谷本奈穂^{たにもなほ}が、欧米の研究をまとめたところによれば、整形手術の歴史は古代インドにさかのぼるとい^{＊20}う。当時、身持ちの悪い娘の父や妻の夫は、彼女たちの鼻を切り取ることができた（！）。不幸にも鼻を切り取られた女性たちは、外科医に救いを求めた。紀元前七五〇年頃のインドでは、鼻の整形手術はそうとう高いレベルに達していたようだ。身体の「再建」を目的とする医療行為は、かなり古くから行われていた。

文化人類学者の川添裕子^{かわぞえひろこ}いわく、「人間は身体を加工する動物^{＊21}」である。身体を何らか

の形で変形する慣習は、世界各国、いつの時代にも存在していた。中国の纏足^{てんそく}や、ミャンマー、タイのパダウン族のように、生まれたままの身体を加工する文化は数えきれないほどある。西欧では中世から近代にかけ、コルセットが女性の「美しい身体」をつくった。文化ごとに「女性の足は小さければ小さいほど良い」とか、「首は長い方が美しい」「ウエストはくびれて骨が変形しているくらいがいい」など、価値観も方法もさまざまだった。この観点からいえば、現代社会の「美容整形」もまた、世界中にあふれる「身体加工文化」のひとつである。

西欧近代では、麻酔などの医療技術が発達し、クリミア戦争や第一次・第二次世界大戦などで負傷した兵士たちの顔を元に戻す「再建手術」が数多く行われた。アメリカでは二〇世紀以降、この「再建手術」のテクニクが、外見に悩む一般人にも応用されていく。

20 谷本奈穂『美容整形と化粧の社会学』新曜社、二〇〇八

21 川添裕子『美容整形とへ普通のわたし』青弓社、二〇一三

「コンプレックス」概念によって、美容整形が正当化された

心理学者アルフレッド・アドラーが提唱した「コンプレックス」概念が、こうした行為の正当化に一役買った。「コンプレックスは解消すべきである」という考えが浸透し、「外見の悪さがコンプレックスなら、整形手術を受けるのも致し方ない」という風潮ができあがっていく。

一九二〇年代は、アメリカでダイエットがブームとなった時期でもある。^{*22}ダイエットの歴史をまとめた海野弘（うんのひろし）によれば、女性たちの間では、重くて身体のラインがはつきりしないドレスに代わり、肌を露出した細身のファッションが流行した。古い階級制度で、頂点に君臨していた裕福な中年女性に代わって、若い女性が新たなヒエラルキーのトップにおどり出る。ファッションの流行と相まって、女性たちはダイエットに一生懸命になった。一九二〇年代には、外科的に脂肪を切り取る施術が、形成外科によって認められた。美しくなるためなら、健康な身体にメスを入れることが正当化されるようになった。

現代の美容整形が特異なのは、近代化とグローバル化によって、「白人」の美しさが理想とされている点だ。高く筋の通った鼻、白い肌、大きな目などが、特に女性たちにとって、

グローバルな「美の規範」となっている。欧米圏の女性たちも、アジア圏の女性たちも皆、「より白人らしく」なりたがっているともいえるだろう。冷静に考えてみれば、恐ろしいことかもしれない。

日本で最初に美容整形手術（二重まぶたの形成）が行われたのは一八九六年と、^{*23} だいぶ昔に遡る。ただ、「美容整形」が一般的になったのは第二次世界大戦後のことだ。アメリカやヨーロッパと同じように、戦時中は負傷した兵士の「再建手術」が優先され、戦後はその技術が「普通の人々の外見を良くするために」応用されていく。戦争をきっかけに技術革新が起こるのは、航空分野も通信分野も、美容整形も、同じかもしれない。

さきがけとなった「じゅうしん十仁病院」は一九四五年、美容整形外科を含む総合病院としての診療を開始した。同院などの働きかけによって、一九七八年には厚生省（当時）が、「美容外科」を正式な標榜科として認定。その後、クリニック数、施術数ともに右肩上がりが増えてきたのは、先に述べた通りだ。

「プチ整形」ブームによる、整形のカジュアル化

いくら美容整形が正式な「標榜科」として認められても、「整形」にはどこかいかかわしく、暗いイメージがつきまとうていた。「親からもらった体に傷をつけるなんて」という考えも根深かった。

流れが大きく変わるのは二〇〇〇年代以降、「プチ整形」という言葉ができてからだ。今やすつかり市民権を得ている「プチ整形」だが、その起源や定義には諸説ある。

「美容整形科」を診療科として認めるよう要請した十仁病院によれば、一九九七年に同院が「鼻と顎あごのプチ整形」を診療に導入したのが始まりだそうだ。これを機に「プチ整形」が多くのメディアに取り上げられ、普及したという。^{*24}

一方、新宿でタカナシクリニクを運営する高梨真教院長は、「有名な美容ライターのほうがうちでヒアルロン酸で鼻を高くして、その時に雑誌『FRaU』で『プチ整形』とタイトルを付けたのが発端」と語る。^{*25} 彼はブログで、その時期を「二〇〇一年頃」としている。^{*26}

「注射などによる『プチ整形』と呼ばれる美容外科施術が注目を集めています。二〇〇〇

年頃、雑誌『FRU』の記事のタイトルで使用されたことが、『プチ整形』という言葉の誕生だと思われます。私のクリニックの記事ですが、その時にヒアルロン酸注射で、鼻を高くした著名な女性美容ジャーナリストが名付けました。皮膚科などでも気軽に行え、金的にも安価なため、『プチ整形』によって、美容外科施術が身近に感じられるようになったことだと思えます。今や、『プチ整形』は世の中で整形よりも化粧品に近い感覚になってきたように思います」

諸説あるが、「プチ整形」は九〇年代後半から二〇〇〇年にかけて、美容外科や美容雑誌が広めたといえそうだ。フランス語で「小さい」を意味する「プチ」の語は、可愛らしい響きでもって「美容整形」へのイメージを一新した。「プチ整形」は二〇〇二年度版の『現代用語の基礎知識』（自由国民社）にも掲載され、すっかり馴染み深いものとなった。

24 「十仁病院」公式サイト

25 高梨真教、中村うさぎ、前掲書

26 「マッド高梨のガチブログ」二〇一四年二月一日、『『プチ整形』のはじまり。』

常に進化し、定義できない「プチ整形」

「プチ整形」の定義は何か。「メスを使わない整形」と考える人が多いが、実は正式な定義は存在しない。

講談社の美容雑誌「VOCE」の公式サイトでは、プチ整形を「メスを使うことなく顔を形質的に変化させる医療行為の俗称」として^{*27}いる。一方、タカナシクリニックスの高梨院長は、プチ整形について「医学用語でもないから、誰も規定しているわけじゃない」「厳密な定義はない」と述べている。美容整形の体験を書籍化して話題になった作家の中村うさぎは、主治医である高梨院長との対談で、「プチ」と「本格整形」の違いを次のように語っている。

「私の中では後戻りができないものが本格美容整形。二重でも、埋没法は糸を抜けば前^{*28}に戻れるからそれはプチ」

中村の感覚でいえば、メスを使った整形は、患者側からみて大袈裟^{おおげさ}に感じられるし、「大ごと感」があるという。確かに、皮膚を切つて縫うという行為は気軽にできるものでは

ない。

高梨院長は中村の発言に対し、「スレッドリフトは？ プチに入る？」と尋ねている。「スレッドリフト」とは、近年人気が高まっている施術のひとつだ。トゲのような突起のついた糸を皮膚に埋め込み、その取っ掛かりの力で皮膚を引き上げて「たるみ」を改善する。皮膚を切らずにすむため「プチリフト」と呼ぶ向きもあるが、手術時間は長めだ。「プチ」といっても、限りなく「本格整形」に近い。

ちなみにこの「スレッドリフト」に関しては、大手美容クリニックで施術を受けた女性たちが、「施術を受けた直後から約一ヶ月にわたり頭痛が続き、痛みがなくなると効果も消えた」として集団訴訟を起こしている^{*29}。

プチ整形という言葉によって「整形」のイメージはずいぶんとかジュアル化したが、一方で、十分な説明もないままに施術を勧めるクリニックが増えたり、患者もリスクを考えずに施術を受けたりして、後悔するケースは多い。

27 「VOCE」美イキベディア「プチ整形」の項目

28 高梨真教、中村うさぎ『マッド高梨の美容整形講座』マガジンハウス、二〇〇六

29 美容施術訴訟…「品川美容外科」側、初弁論で争う姿勢（毎日新聞二〇一四年一月二二日）

国民生活センターは、「プチ整形」ブームが定着しつつあった二〇〇四年、美容医療にかかわるトラブルが増えていくとの警告を出した^{*30}。相談の大半は女性だが、男性も二割を占める。年齢をみると、女性の場合は二〇〜三〇代が突出して多い一方、男性では二〇代（五・五％）に次いで一〇代も二三・一％と目立つ。

相談が寄せられた施術のトップは、「脱毛」関連で九〇九件、次いで「レーザー」関連が八二七件、「包茎」関連が五七九件、「二重まぶた」関連が三八二件など。若い男性からの相談は、「包茎」手術で高額な請求をされるケースが多い。

美容医療にかかわる相談件数(図7)は右肩上がりだ。二〇〇七年には千五百件を突破し、一二年一月末には、国民生活センターが「美容医療・契約トラブル一〇番」と題した期間限定の相談窓口を設置するまでになった。

窓口には一週間で、美容医療にかんする相談が九三件寄せられた。年代別では、三〇代、六〇代からそれぞれ二一件（二三・一％）と多い。平均年齢は四七・六歳だ。アンチエイジング需要が高まり、美



図7 国民生活センターに寄せられた「美容医療」に関する相談件数

容クリニックを訪れる中高年が増えたことのあらわれかもしれない。施術内容（図8）も、シワ取りやたるみ取りなどが目立つ。

二〇一四年度の最新データでは、美容医療関連の相談件数は一九五五件。この十年で二倍に増えたことになる。国民生活センターの資料によれば、契約者の年代は、二〇代が四割、次いで三〇代が二割強で、二〇〜三〇代が六割を占める。一方、四〇代以上からの相談も四割と、決して無視できないボリュームだ。

相談内容の約半数は、「販売方法」や「広告」などに問題があるケースだ。特に「説明不足」に分類されるものが多く、宣伝文句を信じて、知識のないままに施術を受けてしまった人が多いとみられる。

国民生活センターには、「溶ける糸で行う頬のリフトアップの説明を聞きに美容クリニック

施術内容	相談数
しわ取り	20
たるみ取り	13
しみ取り	9
脂肪吸引	8
包茎手術	8
脱毛	7
二重まぶたの手術	6
隆鼻術	6
男性器増大手術	5
わきがの治療	5
多汗症治療	5
豊胸手術	2
傷跡修正手術	2

図8 平成24年1月23日~27日にかけて、国民生活センター相談情報部特設窓口へ寄せられた相談の「施術内容」内訳 ※複数回答

クに行ったら、溶けない糸で手術をされた。元に戻し返金してほしい」とか、「数ヶ月前ヒアルロン酸を注入する豊胸手術を受けたが、思ったほど効果がなく今も痛みがある。残り一回の手術を受けずに解約したい」などの相談が日々寄せられている。^{*32}

美容整形を受ける人が増えるにつれ、消費者トラブルも増えている。大手美容クリニックでは二〇〇九年、腹部の脂肪吸引を受けた女性（七〇歳）が死亡する事件があった。執刀した三〇代の医師は「業務上過失致死罪」に問われ、一二年に禁錮一年六ヶ月、執行猶予三年を言い渡されている。

「もっと綺麗になりたい」「若々しい外見を取り戻したい」など、美容整形へのニーズは高まるばかりだ。にもかかわらず、クリニックも医師も「玉石混交」^{ぎよくせきこんじょう}で、消費者がそれを見抜く知識が追い付いていないのが現状である。

あふれる「ビューティー・コロシアム」の「お説教」が人々を安心させる

美容整形が身近になる一方、メディアには「整形にまつわる旧来的な言説」もあふれるようになった。「簡単に整形なんてすべきではない」とか、「整形に踏み切るには、トラウマなどの重大な理由が必要である」といったものだ。

象徴的なのは、二〇〇〇年代前半に放送されていた「B・C・ビューティー・コロシム」(フジテレビ系列)である。番組では、外見にコンプレックスをもつ一般女性が登場し、これまでいかに容姿で辛い思いをしてきたかを訴える。

ある女性は、幼い頃から「フグお化け」と罵^{のの}られてきた。イジメはエスカレートし、思春期には外見を理由に、暴力を受けるように。誰にも相談できず、部屋に引きこもるようになった彼女は、母親から「綺麗な子に産んであげられなくてごめんね」と、謝られたそうだ。

またある女性は、小学校の頃から「ナメクジ女」と罵られ、給食時に塩をかけられたという。高校卒業後、工場に勤務したが、それでも「気持ち悪い」「気味が悪い」といじめられ続け、それでも何とかして綺麗になろうと、頑張ってお化粧しても「気持ち悪い」と陰湿なイジメを受けたそうだ。

皆、ひどい「外見差別」に苦しんできた女性ばかりである。

「綺麗になって新しい人生をスタートさせたい」「まともな恋愛がしたい」と、切々と語る

出演者たち。ほぼスツピンに、垢抜けない私服でスタジオに佇む女性は、いかにも「ブス」という形で演出されており、さらには「デブ」や「ババア」であったりもする。観ていて辛くならない人は、いないのではないかと思う（そういう風に演出されているのだから当然だが）。

番組では、出演者の半生がVTRを交えて紹介された後、司会者の和田アキ子や島田紳助、ゲストのタレントたちがコメントをする。それぞれ好き勝手なことを言うが、「ブスの辛さ」を訴える女性に対しては、概ね同情的だ。

「身も心も美しくなって、人生を変えたい」という訴えが認められると、「ビューティー・コロシアム」の扉が仰々しく開く。その後は数ヶ月ほどかけて、メイクやエステ、美容整形などのプロフェッショナルが、彼女の外見を改造。後の放送では、見違えるように美しくなった女性がスタジオに登場し、自信に満ちあふれた表情を見せる。めでたしめでたし……という番組だった。

もちろん番組のコンセプトとしては、「美容整形」を安易に勧めているわけではない。出演した女性の中には、和田アキ子や島田紳助、スタジオのゲストたちに、「外見を変えれば人生の問題がすべて解決するなんて、甘い考えではいけない」と諭された結果、「顔ではな

く、心の問題を何とかしよう」と「改心」するケースもある。ゲストらのお説教を受けて考え直す出演者の姿は、どこか視聴者をホッとさせる仕掛けになっている。

なぜ整形を受けるだけで「ゴミ雑巾」「ゴリラの化け物」と書かれるのか

番組内で「美のプロフェッショナル」として、多くの整形を担当したのは、大塚美容形成外科の医師だ。同外科のホームページには、「ビューティー・コロシウム」に出演した女性たちの「Before → After」写真が何枚も掲載されている。^{*33}

よく見ると、施術後は確かに皆、綺麗になっっているのだが、「Before」に付けられたキャッチコピーが酷い。^{ひど}「宇宙人と罵られたアゴ無し私」、「ナメクジと呼ばれ続けた私。暗い人生から抜け出したい」「私の顔はゴミ雑巾 綺麗になっ人並みに生きたい！」などは、壮絶だがまだ見ていられる。しかし、「ゴリラの化け物の孤独」「悪夢の再来…ホクロお化けの恐怖」などに至っては、ヒト扱いすらされておらず、見ているこちらまで罪悪感どころか、被害者意識を抱いてしまう。

「ゴリラ」「お化け」などと表現されるのが、みんな女性であることも、被害者意識の要因だろう。かつてフェミニズムは、男性が「見る性」なのに対して、女性は一方的に品定めされ、外見を評価される「見られる性」であることを発見した。その「見られる性」が見られるがゆえに「ブス」だの「ゴミ雑巾」だのと罵られてきたというストーリーは、決して心地いいものではない。

もしかすると「整形で綺麗になって、幸せになる」という行為を妬ましく思われないよう、あえて「整形前、彼女たちはいかに不幸だったか」を強調する意図があるのかもしれない。外見が悪い女性たちの「不幸」を、ことさらに強調するこの番組は、多くのジャーナリストや学者たちから批判されてきた。

ジャーナリストの石井政之いしひ まさゆきは、この番組の本質を鋭く言い当てている。いわく、「ビューティー・コロシウム」の表向きの意図は、「顔じゃないよ、心だよ」だと思われているが、本当は「顔じゃないよ、コンプレックスだよ」というメッセージを送っているのだと。^{*34}

「あなたは顔ではなく、心が問題なのだ」から、「あなたは顔が問題なのではなく、外見コンプレックスを抱えていることが問題なのだ」へ。こう言い換えてみれば、偽善的なニュアンスが消え、一気にあからさまな表現になる。出演者の「外見コンプレックス」に焦点

を当て、それを「ショー」として鮮やかに描いてみせるのが「ビューティー・ロシアム」の本質なのだ。

確かに、外見コンプレックスに苦しむ人間が、それと格闘していくさまをショーとして見せるのは視聴者受けしそうだ。私たちはテレビの前に座って、まさに「コロッセウム」の中で行われる「ブスたちの、外見コンプレックスとの格闘」を楽しむのである。

番組の主張はこうだ。「整形するには、単に『綺麗になりたい』という短絡的な考えだけでは許されない。外見を理由に酷いイジメを受けてきたなど、それなりの理由（深刻なコンプレックス）が必要である。そうでなければ安易に整形などすべきではない」。

この、やや説教臭いメッセージを受けて、出演者は悩みながら「整形」を決意したり、やっぱりやめようと決心したりするのである。そこには逡巡しゅんじゆんのプロセスがあり、彼女たちがコンプレックスと格闘するさまが「面白い」のだ。

しかしながらこうした演出は、プチ整形をはじめとする「整形」が身近に、かつ手軽になつていくからこそその「理由探し」のようにも思われる。簡単に「綺麗になりたいから」

と整形手術を受ける風潮があるからこそ、そのカウンターとして「ビューティー・コロシ
アム的なお説教」が必要とされるのではないか。

番組内での「お説教」Ⅱ「簡単に整形などしてはいけない」というメッセージは、多く
の人を安心させる機能を果たしている。

作家、中村うさぎの整形が批判されたのは、理由が「安易」だから？

美容整形の普及に一役買ったと言われる中村うさぎは、二〇〇二年から二〇〇六年頃
かけ、プチ整形から本格的な美容整形をみずから実践し、その過程を美容雑誌や週刊誌で
公開した。彼女は整形の痛みや、身体加工を通して得られた「自意識の変化」などを、明
晰かつリアルな筆致で綴り、書籍化もしている。

それまで「タブー」とされていた、美容整形の過程を公表、みずから観察して文章にま
とめるといふ行為は、ジャーナリストや一部の学者などからは高く評価される一方、「美し
さや若さに拘泥こうでいするのはよくない」などの非難も受けた。作家が美容整形し、それを公表
する行為自体が許せないという人は、おそらく文壇の偉い人たちの中にもいただろうし、
フェミニストの中にもいただろう。一般人男女からも、批判は噴出*35した。

中村が整形体験について書いた作品は、どれも「美」や「コンプレックス」をめぐる深い洞察に満ちている。にもかかわらず、「整形アレルギー」をもつ人たちからすれば「許せない」のだ。

中村は「自分の顔が嫌いだから、理想の美しい顔になりたい、若く見られたい」という理由で整形手術を受けた。こうした理由は、「ビューティー・コロシウム」的な価値観からすればNGである。この社会には、まだまだ「整形アレルギー」が満ちている。

作家である中村うさぎの文章では、まだ、整形に至るまでの「外見コンプレックスと向き合う過程」が冷静に分析されていた（作家なので当然ではある）が、読者モデルのギャルたち（冒頭のぐり・ぐら「吉川ちえ・ちか」姉妹）が整形を「実況」するSNSの投稿には、「アイプチでまぶたが荒れちゃったから、二重整形ふたえすることにしました！ 少し恐いけど勇氣振り絞るよん（笑）」という「ぶつちゃけ」があるだけだ。

そこには、外見の悪さから報われない人生を送ってきて、「こんな気持ちで生きたくない

35 第四章で行なった中村うさぎへのインタビューで、彼女は「美しくなりたい」との動機で整形を重ねる自分を、フェミニストたちは嫌った。と語った。

いい！ 私は変わりたい！」「このままじゃいけない、悩みを克服して頑張りたい！」と訴える「ビューティー・コロシアム」の出演者たちのような、コンプレックスとの格闘の軌跡は微塵みじんもない。だから、「整形する動機が理解できない」「意味が分からない」と非難されてしまう。

身体加工をめぐる若者たちの意識は、ギャルたちの「ぶっちゃけ」が受け入れられるほどには、変わりつつある。吉川ちえ・ちか姉妹のように、読者モデルであり、整形が「キヤラ作り」やパフォーマンスに近くなっているケースは少数派だが、多くの女性は「もうちょっと可愛くなりたい」とか、「もっと化粧がキマる顔になりたい」などの「軽い」理由で、美容外科の無料カウンセリングを受けに行く。その日のうちに施術を済ませ、「ちょっと綺麗になった（なれる）私」に満足して帰っていく。次の日から普通にメイクをして、学校や職場に出かけていく。

整形したい理由は、七割が「自己満足」「理想の自分に近づきたいから」

社会学者の谷本奈穂は二〇〇五年に、大学生七六五名を対象として「美容整形に関わるアンケート」^{*36}を実施した。驚くべきことに、対象者のうち四五・二％が「整形したい」と

答えたという。男女別では、男性（二四・五％）に対し女性（六三・一％）と、ジェンダーによる差が大きい。いずれにせよ多くの若者が、美容整形に何らかの関心を示している。「整形したい理由」として圧倒的に多かったのは、「自己満足のため」（四〇・七％）、次いで「理想の自分に近づきたいから」（三六・二％）だった。両者を合わせると、実に七六・九％が、「自分のため」と回答したことになる。

調査では、これまで美容整形の理由付けとして想定されがちだった「コンプレックス克服」に対応する、『人並み』の外見になりたいから』は一三・八％、「異性にモテたい」に対応する「異性に好かれたいから」は一五・一％にとどまった。

男女別にみると、男性の方が「異性に好かれたいから」と回答する割合が圧倒的に高い。「異性にモテたいから整形したい」というのは、より男性的な考え方といえそうだ。女性はむしろ、「すてきな同性を見て」「整形の情報が雑誌やテレビなどで報道されているので」「身近な人がしたから」など、メディアや日常生活で目にする同性を意識して、整形へのモチベーションを高めている。また、他人から外見をほめられる人ほど、「理想の自分に近づ

きたい」「自己満足のため」と答える割合が多いことも分かった。若者、特に女性たちは、深刻な「劣等感」というより、「自己満足」のために整形したいと思っている。

谷本は調査結果から、主に女性たちの身体意識が、これまで正当化されてきた「劣等感」からも、「モテたい」という理由からも脱却しつつあると述べる。すでに周囲から外見をほめられるほどの容姿なのに、(あくまで自分のために)身体を変えたいという欲望があるのだ。他者からの評価よりも、「自分が自分をどう思うか」の方が大事になっている。

もちろん、中には深刻な外見コンプレックスから「人生を変えたい」と、覚悟を決めて美容クリニックの門をたく者もいるだろう。が、「プチ整形」という言葉が象徴するように、顔や体をちよつと変えることは、美意識の高い現代女性たちにとって、「化粧の延長線上」のようなものになっている。

「ビューティー・コロシウム」が想定しているのとは全く違った「自己満足のため」という「理由」が、現代社会に浸透しつつある。自己満足のための整形は、「ビューティー・コロシウム」では司会者やゲストたちから説教され、整形をしないよう「改心」する(させられる)パターンである。

「ビューティー・コロシウム」のような番組が受けていたとすれば、女性たちが「自己満

足のため」に綺麗になることを、あまりよく思わない風潮があったのかもしれない。

高い視聴率を誇り、「見た目依存社会」に一石を投じたあの番組は、もう放送されていない。が、人々が「外見コンプレックスといかに格闘しているか」を観たいという欲望は、まだまだ根強いようだ。最近では「私の何がイケないの？」(TBS系列)というバラエティ番組で、自分の全てを変えたいと美容整形に何千万円もつきこむ女性(ヴァニラという名前で活動している)が登場し、話題になった。

彼女の自伝的フォトエッセイ『超整形美人』(竹書房、二〇一三(図9))で語られるその「動機」は、幼少期に外見のせいでイジメを受け、父親からも「ブサイクなのだから仕方ない」と言われ、深い傷を負ったという点が強調されている。整形にかかる費用はすべて、夜の仕事で稼いだという。

現在も定期的に、美容クリニックに通う彼女は、こう言い放つ。「綺麗になるために努力して、何がいけないの？」

ヴァニラは「生けるフランス人形」を目指しているそうだ。彼女は、自らを「カスタム



図9 ヴァニラ『超整形美人』
竹書房、2013

「ドール」と呼ぶ。テレビなどで、こうした発言を耳にした人は、おそらく次のように感じるだろう。

「幼少期にイジメられて自己肯定感が低くなり、自分の外見をすべて変えることで何とか現実に適応しようとしているのだろう。外見を変えれば人生が変わると思っっているのかもしれない、かわいそうに……」

そう考えることで、思考停止している人たちは多分、彼女を「自分とは別世界の人間」と切り離し、エンターテインメントとして楽しんでいるのだと思う。

整形をめぐる言説は、同じ所をぐるぐる回っている

ヴァニラさんの例に限らず、整形美人の「心の闇」を強調する言説は多い。「深い自己嫌悪やコンプレックス」という動機があるからこそ、人は整形に走ってしまうのだ」と思い込みたい気分が、世の中には満ちているようだ。

一方で「整形のカジュアル化」という現実がある。他方で、私たちが整形を語るときはいつも、「コンプレックス」や「心の闇」が強調される。美容整形をめぐる言説は、同じところをぐるぐる回っている。結局、「整形するのは自由だけど、彼氏（または彼女）が整形

するのは抵抗感があるよね」とか、「なんだかんだ言って整形はズルいし、うしろめたいことだよ」といったところに落ち着いてしまう。

「整形した人の事例を知る↓その人の人格を、精神論（彼女は自己肯定感が低いのだ、外見が要因となった心の傷があるのだ）で解釈する↓整形は結局、あまりよくないことであるという結論へと至る」というお決まりのパターンが、繰り返される。このもどかしさは何だろうか。

「ビューティー・コロシウム」的な「お説教」は、そうしたもどかしさを深掘りする思考を拒む。整形を繰り返す女性を登場させて「見せ物」にした「私の何がイケないの？」も、基本的には「ビューティー・コロシウム論法」と同じだ。整形という行為が、美しくなりたい現代人の「病」と関連付けられ、「美しい存在に憧れすぎて自分を見失ったバカ女（または男）のすること」のように描かれる。視聴者はこうした事例を見せられ、「あそこまで整形にハマるのって、すごいよね。他人がすることだから、まあ自由だけど、なんだか不幸そうだよ。ああはなりたくないよな」と、彼我の間に一線を引いて、安心するのだ。

「異形」扱いはされる整形美人たち

テレビのバラエティ番組やネットニュースで話題になる「整形美人」（最近では「整形美男子」も増えている）たちは、完全に「異形」扱いされている。たとえ外見は「異形」でなくとも、醜形恐怖の域に達するほど、自分の顔への客観性を失った人たちであるとみなされている。

彼女たちはきつと、心を病み、藁わらをもつかむ思いで「整形」に走ったのだろう。現代の「整形美人」たちは、たがが外れて暴走した、哀れな人物のように描かれる。

その背景にあるのは、自分の顔を健全に「受け入れる」ことができていれば、整形などしないはずだという考え方だ。ちよつとくらい目や鼻が気に入らなくても、それが「自分」じゃないか。コンプレックスも受け入れて、お化粧でごまかしたり、ダイエットを頑張ってみたりして、生まれ持った自分の顔で生きていくのが「普通」であり、まっとうなのだと。こうした思考のサイクルに陥る際、私たちは整形について、ほとんど何も語っていない。

今、顔を変えること、整形でより美しくなることに対する意識は著しくカジュアル化している。その理由は、メディアで語られるような「劣等感」というより、「自己満足のた

め」「もつと可愛くなりたい」「あの子もしているから」などと気軽なものだ。

こうした現実を見ずに、「整形美人」の一例を取り上げては、「やっぱり整形って、コンプレックスをもった人が最後に頼る行為だよな。基本的にはよくないよ。整形して幸せを手に入れようって考え方が、何か間違っているよね」という語り方をするのは、あまりにも一面的で、十年一日のごとく平凡な「思考停止」状態である。

確かに、身体加工をめぐっては「望ましいあり方」というものがある。「親からもらった体に傷をつけてはいけない」という儒教的な教えや、「皆が同じような美の基準に向かって整形したら、個性が否定されてしまう」という意見も根強い（そういえば、「韓国では大学入学前に二重整形を受ける学生が多い」というニュースが報じられて、「だからみんな同じ顔になっちゃう」と発言した学者もいた）。

このように思考停止状態の人たちは、「なぜ整形がブームになっているのか」「整形する人たちの欲望はどうなっているのか」「そもそも美容整形がなぜタブー視されるのか」などについて、深く考えたことはないのだろう。単に「整形する人は不幸なのだ」と思い込みたいのである。

「ビューティー・コロシウム」の演出のごとく、他人の外見コンプレックスとの格闘を外

野から見て楽しみ、「自分はああならなくてよかった」と安心する人たちは、現代社会に起きている変化に気づいていない。若い世代を中心に、これだけ美容整形へのハードルが下がっているのに、その理由を見ずに「美容整形＝不幸でいかがわしい」と、すべてを片付けてしまっている。

彼らは「自分とあの人たちは違う」と、安心したいのだろう。現代の女性たちが「もっと綺麗になりたい」と、気軽に医療施設を訪れていること、綺麗になるため、身体に注射をしたり、メスを入れたりしていること。留まるところを知らない「美への欲望」が、ぶくぶくと膨張していること。

こうした現状から目をそむけているのは、実にもつたいない。美醜をめぐる欲望を掘り下げれば、私たちの外見コンプレックスや、身体加工をめぐる興味深い論点が、たくさん出てくる。以下、インタビューや作品評などを通して、現代社会の美をめぐる欲望にメスを入れていこう。

第二章
それぞれの「ダウンタイム」ストーリー

プラダやグッチが欲しいという願望と、
下腹の肉を落としたい、二重まぶたにし
たいという悲願とは、同一線上に存在す
るのです。

整形経験者にインタビュー

ここからは、若い女性三人の語りを見ていこう。整形によって彼女たちの人生は、どう動き出したのか。それぞれの語りを見ていくと、周囲からの評価と自己満足との間で揺れ動く感情や、整形によって変わったこと、変わらなかつたことが少しずつ見えてくる。

インタビューは二〇一五年一月、インターネット上に本の趣旨を掲載した募集フォームを作成し、ツイッターで拡散。応募があつた六人のうち、謝礼や日程の条件を承諾してくれた三人に、じっくりと話を聴いた。

年齢はいずれも二〇代前半で、学生が一人、社会人が二人である。それぞれ別の喫茶店で話を聴いた。皆、快く自分の思いを話してくれた。「ここまで、明るくぶっちゃけてもらえるのか」と、同席した編集者（二九歳男性）が、驚いていたほどである。彼女たちは皆、美容整形に至つた経緯や今の気持ち、冷静に分析していた。そして、驚くほど皆、素直で「普通の女の子」たちであつた。

〈きっかけ〉市村^{いちむら}さんの場合

一七歳で目頭切開

市村さん（仮名）は、二三歳の社会人。黒髪と白い肌が印象的だ。彼女は一七歳の時に

目頭切開手術を行った。きっかけは、高校を退学し、時間ができたことだったという。

「全日制の高校に通っていたんですけど、合わなくて退学して。で、通信制の高校に行こうとなった時に、じゃあもう、しがらみとかないし、やりたいことやっちゃおうと思って。それでやりました」

目頭に切り込みを入れる施術なので、さすがに「安いところは不安」と考えた市村さんは、ネットで色々な病院の情報を調べに調べた。結果的に、チェーン展開しているクリニックではなく、個人医院を選んだ。

整形前は、時々「メザイク」というストレッチ性のファイバーを使って二重ふたえまぶたにしていたが、「あんまり綺麗な二重にならないな」と感じていた。「私、目の形が割と丸っこくて。それで一重だったんですね。で、何かアイプチとかしても、変な感じっていうか。目の幅がないから……」。

手術を受けるクリニックを決めた後は、もう迷いはなかった。「最初は怖かったですけど、もういいかな、みたいな。大丈夫だって」。一八歳未満の場合に必要な保護者の同

意書も、自分で書いた。が、親と同居しているので、さすがに術後はバレてしまった。

「親には帰った直後に、縫い目があるから、『あんだ、したでしょ!』って言われましたけど。親は、わりと（整形には）理解がある方だと思いますね」と、市村さんは小さく微笑んだ。

ダウンタイムも冷静

目頭切開を受けた後は、目頭に「ばってん」の傷がつく。術後、抜糸して傷痕が落ち着くまでを「ダウンタイム」といい、この間に「傷が治らないのではないか」「人よりも腫れが大きいのではないか」と不安がる人も多い。が、市村さんはいたって冷静だった。

「ダウンタイムは、あんまり記憶にない」。それほど腫れることもなかった。手術痕が安定していないため、少しは不安になったが、「ネットの体験談とか見ても、『最初すごい切れ込みが深くて、どうなるかと思ったけど、段々馴染んできたから』みたいな話を聞いてたんで。わりと平気でしたね」。

ダウンタイムが終われば、理想通りの「切れ込み」ができあがった。鏡を見た時、「違う

自分になれた」と思った。

「なんかやつぱり気持ちが軽くなったというか。『なんかいつもと違う！』みたいな。違う自分になれた！ みたいな。そういうのはありましたね。アイプチの出来も全然、違って。元々アイプチはそんなに毎日していたわけじゃなかったんですけど、アイプチも、たまにするくらいになって」

目頭切開をしてからは、アイラインを引く時の「気分」も変わった。

「アイラインを引くと、『見える！』みたいな。それまではアイラインが、まぶたに隠れてた、みたいなのがなくなって、目頭の部分まで見えるようになって。目頭が埋まらなくなりました」

ナチュラルメイクの彼女だが、アイラインが引きやすくなったことは本当に嬉しかったという。気分も軽くなった。

願いました。だいぶ自然に仕上げてもらって」

アイプチで作っていた二重の幅に合わせて施術をすると、不自然さがなく、バレにくい。カウンセリングを受けたその日に、手術を受けた。

「けっこう、ちやちやつと終わっちゃいました。痛みには、怖いとは思いましたが、仕上がりに関しては怖いとか、そういうのはなかったです」

ダウンタイムも、「普通に腫れてるなく」という感じだったという。

「あかし、そんなに目が大きい方じゃないので、腫れてもそんなに怖くならないっていいか。すごく泣いた次の日くらいでした」

医師からは、手術した翌日からメイクができると言われ、三日くらいで二重まぶたが完成したという。

「二重^{ふたえ}だと全然、顔が違うね」

もともとアイプチをしていたとはいえ、埋没法で二重^{ふたえ}が完成すると、やはり顔の印象は変わる。より「可愛く」なり、周りからも「可愛い子」だと思われるようになった……というのを、市村さんは実感するようになった。

手術後に、以前勤めていたアルバイト先の知人と遊びに行った時のことだ。その場には友人の彼氏がいたため、(二重手術をしたことは言わず)アイプチをしているような素振りで接したところ、「二重だと全然、顔が違うね」と言われたという。

「そのとき思ってたんですけど、やっぱりあたし、全然、何か(手術前は)女として可愛いと見られてなかったんだな〜って、すごい痛感して、『取るに足りないヤツ』くらいに思われてたんだなって気づいて……」

手術後は、男性が自分を見ている顔が「全然違う」という。

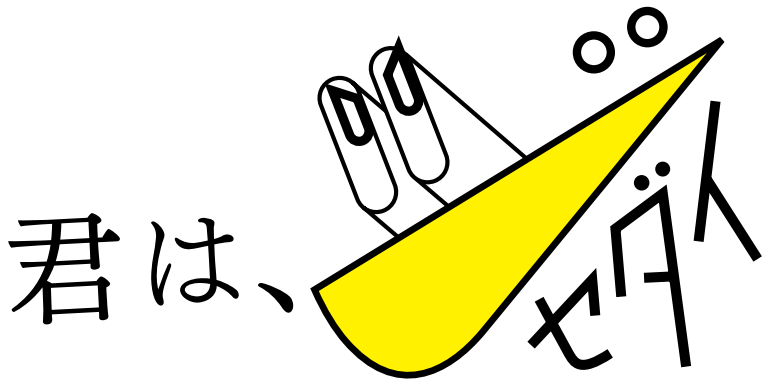
「なんか、全然違うんですよ。本当に。私を見ている顔が違う」

それから彼女は、自分が周囲から見て「可愛いカテゴリー」に入ったのかもしれないと気づく。男性は（女性以上に）異性を見た目で判断するのだということ、整形する前よりも、強く意識するようになったのだ。大学に入ってから、彼氏ができて男友達が増えたことで、その実感はより強固になっていく。

（きっかけ）アキさんの場合「整形しようって、中学の頃から決めていた」

アキさん（仮名）が整形を決意したのは、中学生の頃だ。都内の大手企業に勤める二三年歳の彼女は、大学時代に二重まぶたふたえの手術をした。目頭切開と埋没法を組み合わせ、埋没法だけの施術よりも、幅の大きな二重を作る方法だ。

「就職先も決まって、あと卒業ってなった時に、先に目とか、そういうダウンタイムの長いものをやっておこうと思ってやりました」というアキさんは、中学生の頃から、醜形恐怖症といわれるほどのコンプレックスに悩まされていた。



君は、

ジセダイ

何と闘うか？

<http://ji-sedai.jp/>

「ジセダイ」は、20代以下の若者に向けた、**行動機会提案サイト**です。読む→考える→行動する。このサイクルを、困難な時代にあっても前向きに自分の人生を切り開いていこうとする次世代の人間に向けて提供し続けます。

**メインコンテンツ
イベント**

著者に会える、同世代と話せるイベントを毎月開催中！ 行動機会提案サイトの真骨頂です！

ニッポンのスタートアップ

3年後に再会することを約束して行う、未来アポ付きスタートアップインタビュー！

ジセダイジェネレーションズU-25

彼らはどうやって「闘う相手」を見つけたのか。各界の超新星に、その軌跡と未来を聴く。

マーカー部分をクリックして、「ジセダイ」をチェック!!!

行動せよ!!!